

脱セクシュアル・ハラスメント宣言 法制度と社会環境を変えるために

セクシュアル・ハラスメントの関係書籍は巷にあふれている。

それだけ議論の余地があり、社会の関心が高い分野であるにもかかわらず、この問題を根絶することの難しさを、私自身仕事を通じて感じている。

本書は、第1章が現状、第2章が対策、第3章が資料という構成になっており、編著者が弁護士であることもあってか脱セクシュアル・ハラスメント社会への提言にまで踏み込んでいるが、特筆すべきは、本書が各分野でこの問題を扱い、関心を寄せている人たちのそれぞれの「声」で構成されているということである。

若い世代からの告発として「私たちは悪くない」という文章も興味深いが、職場のハラスメント研究所代表の金子雅臣氏の「男たちの意識をどう変えるか」と題する文章が印象に残る。

金子氏は、ジェンダーギャップ指数が100位以下である日本においてなぜハラスメントに対する理解が進まないのかを分析する。そして、この問題を解決するためには男たちの意識をどう変えるかが急務としながらも、「場合によっては、女性以上にセクハラに不快感を感じ、セクハラ男に怒りを感じている男性たちもいる。」と、男性が十把一絡げにされる風潮を嘆き、セクハラを「する男」と「しない男」が厳然と存在することを指摘するのである。金子氏の「L館事件」の地裁、高裁、最高裁のそれぞれの判断に対する分析は、一見平易な文章ながら読み手にセクシュアル・ハラスメントの問題点を正確かつ端的に伝えるものである。ぜひ熟読してほしい。

原田・川原法律事務所 弁護士 原田 美紀さん

多様な社会はなぜ難しいか 日本の「ダイバーシティ進化論」

東京五輪のキャッチフレーズは、「多様性と調和」だった。だがこの大会は、女性蔑視発言、障がい者へのイジメ、ユダヤ人差別への無理解など、多様性とは真逆の少数派排除が相次いで噴出した。著者の新聞連載コラムを加筆・編集した本書は、このような、「多様化を呼びつつ多様性を排除する」という私たちの社会の奇妙さを鋭く突く。

その原因の一つとして著者が挙げるのが、「多くの人たちのより良い協業を可能とする土台」としてではなく「強い組織づくり」としての多様化が突出してきた現状だ。

ダイバーシティ・マネジメントは、①組織の中での差別と人種の対立の解消、②企業の国際化の中での異文化経営、③競争力の再構築の実は3つの分野にルーツを持つ。日本ではうち、①はなおざりにされ、②と③が明確に区別されないまま進められがちだと著者は指摘する。

このように、日本社会では、差別の解消より企業経営や競争力を優先する「多様化」が進められ、かつ、男性一色の構成による効率経営を重んじる姿勢が続く。こうした社会では、「多様化」は女性などの少数派に対する、「競争のための適応の強制」に容易に転化する。

こうした主張に沿って本書では、「女性活躍」「日本死ねブログ」「父親の育休取得の困難」など、「効率化」の名の下に多様な男女を鋳型にはめ込む行為の数々が、変奏曲のように論じられていく。

社会的公正を原点に据えた少数派による少数派のための眞の多様化へ——。そんな私たちの課題を改めて確認させてくれる好著だ。

ジャーナリスト 竹信 三恵子さん



- 角田 由紀子、伊藤 和子 編著
- 井上 久美枝、北仲 千里、山本 和奈、小川 たまか、浅倉 むつ子、申 恵丰、金子 雅臣、神谷 悠一 著
- かもがわ出版
- 2021年初版
- 2,500円(税別)

ジ エンダーギャップ指数

ジェンダーギャップ指数(Gender Gap Index: GGI)とは、非営利財団の世界経済フォーラムが公表しているGlobal Gender Gap Reportにおける世界の各国の男女間の不均衡を示す指標。

スコアはランキングの形で示される。Global Gender Gap Report 2021では、156カ国中、日本は過去2番目に低い120位とされている。



- 水無田 気流 著
- 日経BP
- 日本経済新聞出版部
- 2021年初版
- 1,500円(税別)

ダ イバーシティ

「多様性」を意味する英語。1950～1960年代に米国で盛り上がった人種差別解消を求める「公民権運動」や、性差別に異議を申し立てる「ウーマンリブ運動」などを土台に、多様な人々が共に力を合わせて働く企業マネジメントとして広がった。日本では、多様な働き手を活用して利益を上げる企業主導の試みとして展開することが多く、反差別・人権・平等という原点に立って、働き手が個性を生かして働く条件整備への取り組みが課題とされている。

フェミニストってわけじゃないけど、どこか感じる違和感について

—言葉にならないモヤモヤを1つ1つ「全部」整理してみた

著者はあきらめない。たとえ雰囲気が悪くなってしまっても、夫との生活でフェミニズムのセンターが反応したらその言動を指摘する。お互いに満足のいく人生を生きるために。著者は、性別による決めつけを変える考え方方がフェミニズムであり、それによって男女が健全な形で一緒にいられるようになると信じている。しかし、韓国では一部の男性を中心に、フェミニストは義務を果たさずに特権を濫用しようとする女性と誤解されている。だから、「フェミニストってわけじゃないけど」と著書は前置きをする。そして、言いたいことを言う。

著者は夫婦の価値観の違いを個人的なこととして捉えず、韓国の根強い家父長制という社会構造に目を向ける。韓国では、男性には依然として経済力が求められる一方、女性の人権意識は向上してきた。そのため、20代、30代の男性は、既得権益を失いつつあるという危機感で、ミソジニー(女性嫌悪)が強くなっているそうだ。だからこそ、この社会で男として育てられて身につけた夫のジェンダー観を理解するために話し合う。相手の意識下のバイアスを言語化する対話で葛藤は生じるが、理解に努力が必要だ。愛し合っているのだから。

ミソジニーは著者自身の中にもあり、女性だからと強いられる犠牲への違和感をかつては抑え込んでいたという。女性役割への義務感と自分らしい生き方との間で考え尽くした経験があるから、対話をあきらめないのであろう。著者は30代前半と若い。が、見習いたい。

西南女学院大学 人文学部 英語学科 教授 倉富 史枝さん



- パク・ウンジ 著
- 吉原 育子 訳
- ダイヤモンド社
- 2021年初版
- 1,500円(税別)

ミ ソジニー

「ミソジニー」は、英語で女性嫌悪・女性蔑視を意味する。家父長制の下、女性を男性に支配され奉仕するものとみなし、抵抗する女性を憎悪するものだ。ソウルの江南駅で30代の男性が面識のない女性を「女性が自分を無視したから」という理由で殺害した事件は「江南ミソジニー殺人事件」(2016年5月)と名付けられ注目を集めた。なお、家父長制は男性を優位に位置づける制度であり性別役割分業化に伴い近代化社会に定着した。

こどもジェンダー

武蔵大学 社会学部 教授 中西 祐子さん

本書は子ども向けのジェンダー入門書として制作された絵本である。著者は助産師・性教育YouTuberのシオリース(大貫詩織)氏。子どもの目線に立った36の質問と考え方のヒントから構成されている。親しみやすいイラストに、ひらがなとカタカナだけを使った説明文がついており、小さな子どもにも分かりやすい。子ども向け絵本の体裁をとっているが、その内容からは大人が学べることも多い。

現代社会の強固な男／女の境界線に、息苦しさを感じる人は案外少なくない。本書は、赤いランドセルが欲しいオトコノコにも、フリルの服は着たくないオンナノコにも「あなたがそう思うならそれで良い」と優しく声をかけてくれる。夫婦間や親戚内において男女が異なる役割を担わされていることや、高卒後の進路選択や政治家のジェンダー・アンバランスについての素朴な疑問も取り上げられている。読み進めしていくと、同性を好きになることや、自分の性別にしつくりがないことも不思議なことではないと教えてくれる。

単なるジェンダー入門書を超えた実践的な本である。子ども同士の「あそび」や「からかい」と捉えられるがちなスカート



- シオリース(大貫 詩織) 著
- 松岡 宗嗣 監修
- 村田 エリー 絵
- ワニブックス
- 2021年初版
- 1,400円(税別)

めぐりやズボンおろしなどの行為も、それらが立派な性暴力であることを指摘し「なぜいけないのか」を真正面から説く。子どもたちが助けや理解を求める先として、親や学校教師だけでなく第3、第4の選択肢が示されていることも興味深い。家庭が安心できる場所ではない子どももいるなかで、多様なネットワークの存在は重要である。

子どもたちに「あなたのからだやじんせいはあなただけのもの」と伝えるために作られた本だというが、大人にもぜひ一読をお勧めしたい一冊である。

